

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	坂東 俊宏
論文担当者	主査 池田 正孝
	副査 平田 淳一
	副査 辻村 亨
学位論文名	Association between pouchitis and ulcerative colitis related-gastroduodenitis after restorative proctocolectomy (潰瘍性大腸炎術後の回腸囊炎と胃十二指腸病変に関する検討)
論文審査の結果の要旨	
<p>【研究目的】 潰瘍性大腸炎 (Ulcerative colitis : UC) は主に大腸に免疫異常を引き起こす原因不明の難病指定の炎症性腸疾患であるが、大腸以外の胃十二指腸、小腸にも UC 同様の炎症が起こりうる。特に大腸全摘手術後に見られる回腸囊炎が近年では増加しており、その難治症例も増加していることが問題となっている。また時に、胃十二指腸にも UC 関連病変 (UC related-gastroduodenitis:GDUC) と呼ばれる炎症も起こるが、それらの原因、関連は明らかではない。そこで両者の関連について検討し発症予測、予防治療に応用できないかを検討している。</p> <p>【研究方法】 2009年1月から2012年12月のUC術後患者を対象とし、回腸囊炎、GDUCの発症率、回腸囊炎の発症リスクについて検討した。術後1年で、症状の有無にかかわらず内視鏡検査を行い、内視鏡所見に加え、性別、発症年齢、病期期間、病型、重症度、術前免疫抑制治療、手術適応、喫煙歴など臨床背景について回腸囊炎発症リスクを検討した。</p> <p>【研究結果】 手術完遂症例188例を対象とした。また上部、下部消化管内視鏡検査を行った経過観察可能症例は122人であった。回腸囊炎は46/122 (37.7%)、GDUCは14/122 (11.5%)に認め、回腸囊炎の累積発症率は32.1%/5年であった。回腸囊炎症例でのGDUC合併は9/46 (19.6%)、非回腸囊炎症例では5/76 (6.6%)であった (p=0.006)。GDUCは回腸囊炎発症の独立した危険因子であった (hazard ratio 2.32, p=0.025)。その他の因子は有意な危険因子とはならなかった。</p> <p>【考察】 UC術後の回腸囊炎とGDUCに関連性が認められた。全身に惹起した免疫異常の関連が両病態の発症に関わっていると推測するが、その他の臨床背景に関わる因子は抽出されず、予測因子の明確な解明には至らなかった。今後はさらなる関連性、予測因子、予防策について検討を継続する必要がある。</p> <p>【結論】 UC術後の回腸囊炎と胃十二指腸病変には関連性が認められた。</p> <p>本研究は、臨床的にも意義ある研究で、今後の潰瘍性大腸炎術後の経過観察においてもその応用も期待されることから学位論文に値すると判断した。</p>	